

# 「へたくそ詩」再評価のために

——『祖国の砂』と『京浜の虹』の性格について（付録目次・索引）——

鳥羽耕史

## 一 両詩集の性格について

戦後のサークル運動で発行されたサークル誌には、いわゆる文学者ではない多様な人々による詩が多く掲載され、それらはサークル詩と呼ばれた。プロレタリア文学の大衆化論の文脈ともつながって、しばしば文学性よりも政治性を重視して作られたそれらの詩について、須藤和光が「へたくそ詩」の論理について<sup>①</sup>で批判したことを契機に「へたくそ詩論争」が展開されたことは、拙著でも述べた通りである<sup>①</sup>。

須藤が「へたくそ詩」を攻撃した直接のターゲットは、「ひよつと」とすると、これは、これまで日本にうまれた、いちばんへたくそな詩集であるかもしれないという「編集のことば」を巻頭に置いた理論社編集部編『京浜の虹 労働者の解放詩集』（理論社、一九五二年）である。一ヶ月前に刊行され、しばしば対にして論じられた筑摩書房編集部編『祖国の砂 日本無名詩集』（筑摩書房、一九五

二年）に対して、あからさまに「へたくそ」を宣言したこの詩集については、同時代的にも賛否が真二つに分かれた。近年では竹内栄美子が、一九五〇年代前半の『人民文学』と『新日本文学』の対立と並行するようにして二つの詩集が編まれた当時の状況を語り、『祖国の砂』の編集に関わった中野重治の営みを検証する中で『京浜の虹』の問題に触れた。「詩と呼べるのかどうか」わからない替え歌など、「いわゆる詩としては成立していないし、文学作品とはいいがたい」ものも含まれるが、「広く民衆の表現を可能にしたという功績は大きかった」と評価している<sup>②</sup>。本稿は、この「功績」の内実の検証を試みるものである。

まず、書物としてこの二冊の本を眺めてみよう。両者とも当時普及していたB6判角背並製のペーパーバック装である。『祖国の砂』は難波田龍起による黄色と赤茶色とグレーを基調としたパステル画のような三人（裏表紙を入れれば五人）の人物像の上に、やはりパステルで手書きしたような赤茶色の「祖国の砂」の文字を横書

きで配し、「日本無名詩集」の副題を黒い活字で記している。薄い水色の紙に水色のインクで印刷した帯文の表紙面には、「全国の無名の声をあつめた／画期的詩集」「あらゆる階層のはたらく人々の素朴な希い、怒り、悩み、喜び、悲しみ―そして、真に平和を愛し、祖国を愛する熱情は、われわれの心を強くうつであらう。全国の各職場、各地域の詩サークル誌、組合新聞等々をあつめ、約三千五百の詩作品のなかからえらんだ珠玉の文字をあつめた。」「なにびともこの無名の詩を無視することはできない」「筑摩書房刊 定価220円 地方売価230円」といった文字が横書きで配され、背には「はたらくものの画期的詩集」、裏表紙や見開き部分には出版広告（ハワード・ファスト『ピークスキル事件』、東大十六学生救援会編『わが友に告げん』、フョードル・グラチョフ『植民地航路』、ベルデン『中国は世界をゆるがす』、スノウ『中国の赤い星』のもの）が並べられている。同じく難波田の装幀による赤茶色の染みのような図形の上にタイトルを記した扉の後、大きな字で組まれた目次が八ページにわたった後、パートごとのタイトルだけの扉に続いて本文の詩が続く、という構成である。巻末には、ゆつたりと組まれた本文と対照的に、小さな字で二段組みにされた作者紹介と、本文並みの字で一段組の秋山清と中野重治による解説が並び、「昭和二十七年八月五日印刷／昭和二十七年八月十日発行」の奥付と、『ピークスキル事件』の広告とで閉じられている。

一方『京浜の虹』は、田村茂による京浜工業地帯の遠景写真を薄

緑色に印刷した上に活字で「労働者の解放詩集／京浜の虹／理論社編集部編」と縦書きにした表紙である。文字を白抜きにして小豆色に印刷された帯の表紙部分には、「はじめてうまれた労働者の解放詩集／生産の動脈京浜が生んだ日本民族の怒りと嘆きと斗いの織りなす七色の虹 140円」という横書きの文字に理論社のダビデ像のマークが添えられ、背には「労働者の解放詩集」、裏表紙の部分には「無名の労働者／無数の労働大衆／これはその中から／生れた世界最初の／力強い解放詩集！」「虹がたつと／何かが起きるような／虹は／何かいいことの／きざしだそうな」「虹のように彩りゆたかなこれらの詩は あかつきを告げる おんどりのごとくさわやか！／理論社／一四〇円」といった文字が縦書きで配されている。タイトルなどを記した扉にはスズキ・ケンジ（鈴木賢二）による切り紙細工で、工場地帯にかかる虹を見る労働者二人とその一人の妻子が描かれ、有名な「編集のことば」以下の本文につながる構成である。詩集では異色の二段組みでぎっしりと組まれた本文は奥付の直前まで続き、「1952年8月25日 第一刷／1952年9月1日 発行」の奥付で終わっている。

書物の成立と編集について、『祖国の砂』では秋山清と中野重治の解説が詳しく記している。「大方三〇〇篇ほどの詩をよんだ」中から「約八〇人、九〇篇ばかりのものをえらび出す」仕事をしたとして、解説の末尾には「本書の編集のために私たちが参考にしたもののうち、特に雑誌・機関誌その他主要のもの」が地域別に列記

されている。選定の基準について、秋山は「うつくしい作品、憤りとかなしみとよろこびとが生活の中から躍動する作品を得ようとした」と記し、中野はそれに加えて「作者たちの芸術上の態度」、すなわち「新しい対象はそれにふさわしい美を必然に要求するということを理解せず、粗雑・簡単に、詩として優れているかどうかは二の次ぎであつて、むしろ気随な怒号であるほど詩として新しいのだという風な敗北主義に立つ人々の作は、大体においてここでは否定された」ことを説明している。「へたくそ詩論争」の須藤の立論の根拠は、当初から中野によって打ち出されていたと見るべきだろう。秋山は「この詩集の企ては、これをはじめとして第二、第三と年毎に続けられようとしている」ため各地の出版物を送ることを求めているが、これは実現しなかった。

『京浜の虹』の場合、一六ページの「この本の 製作にあたった人々」の項で説明されているが、それによれば「このような企画を書物にする原動力をつけてくれた」仕掛け人は、宮本百合子・学生書房編集部共編『わたしたちも歌える』（学生書房、一九四九年）や無着成恭編『山びこ学校』（青銅社、一九五一年）を手がけた学生書房の野口肇であった。谷久平が「じつさいにサークルに呼びかけ 詩を集め仕事をすすめる軸に」なり、理論社の小宮山量平が内容の構成と各章のプロロゴグなどの執筆を手掛けたという。また、巻頭の理論社編集部「編集のことば」の末尾には「谷さん、船方さんをはじめ、おおくの人びとの、あつたい協力が、この本を、うみだ

してくれた」と記されており、船方一も編集に協力していたことがわかる。船方一『船方一詩集』（船方一詩集刊行委員会、一九七九年）の無署名「船方一年譜」によれば、「理論社刊『京浜の虹』の発刊に松崎唯史、松永浩介、山田今次らと鋭意活動」とも記されているので、かなり多くの労働者詩人がこの詩集の編集にも参加していたことが推測される。

『京浜の虹』を一読して気がつくのは、小宮山量平による編集の見事さである。「I労働者の誕生 \*その血のおいたち\*」「II煙る ふるさと \*はぐくむもの\*」「III貧しい朝餉あさげ \*その くらしむき\*」「IVクビ \*失業とさくしゅと\*」「V火花 \*創りだすちから\*」「VI輪になつて \*勝ちちかく\*」「VII嵐ふきすさぶとも \*ととのう戦列\*」という七つのパートが、労働者が生まれ、育ち、働き、困難に出会い、生産し、仲間を作つて連帯し、立ち上がつて闘い勝利する、というストーリーに沿つて構成されているのだ。さらにそれぞれのパートの導入の文章が、すぐ次の詩につながるように書かれており、全体が一つの物語を読むような形で構成されている。最後に置かれた園部亮「虹」という詩は帯文や「はじめに」の虹についての短文やタイトルとも呼応し、無着成恭編『山びこ学校』の冒頭に置かれた石井敏雄「雪」の詩のようにシンボリックな役割を果たしている。さらに版画運動を展開した鈴木賢二（スズキ・ケンジ）による切絵の効果的な使用も、この詩集を大衆に親しみやすいものにしていく。つまり『京浜の虹』は、全体が一つの

有機的な作品として構成された書物なのだ。しかし、それは一方で個々の詩のある事柄を説明するための材料として用いるという傾向になっているとも言える。『京浜の虹』の「党派性」は、ただ『人民文学』派を集めたということでは形成されたのではなく、「京浜労働者」の闘いのアピールという政治性に奉仕する形で詩が集められ編集されることによって作られたものなのである。

対する『祖国の砂』は、「稲熟病田」「祖国」「わたしやくい」「母と息子たち」という四つのパートごとにその中の詩のタイトルを扉に掲げているが、『京浜の虹』ほど明確な構成があるわけではない。その分、むしろ個々の詩を独立したものとしてみせる構成になっていると言えるだろう。「日本無名詩集」の副題通り、ほとんどの詩人は無名もしくは忘れられた存在であるが、その中で井上光晴と谷川雁の名前がひときわ目を惹く。

この時点で谷川は無名詩人のカテゴリーに入るかもしれないが、井上を同じように扱うのは無理があるだろう。彼は一九四六年に入党すると共に九州評論社を創設し、中野らと共著になる詩集や、小田切秀雄や窪川鶴次郎らの単著を出版、一九四八年には大場康二郎との共著詩集『すばらしき人間群』を新日本文学会長崎支部から出版し、共産党の退廃を描いた「書かれざる一章」(『新日本文学』一九五〇年七月号)が問題となつて所感派の指導部から除名処分を受け拒絶していた。なぜ井上がここに入れられなければならなかったかを考えると、やはり「書かれざる一章」に寄せられた批判の数々

と、それに続く「病める部分」を『新日本文学』に投稿したが、一九五一年八月号に至るまで七ヶ月間も掲載されなかった、という問題に関連づけざるを得ない。ここでは「書かれざる一章」問題の解決と、『人民文学』派とは異なる政治的寛容さのアピールが目指されていたのではなかったか。井上の詩のうち「廃港」は『すばらしき人間群』(近代生活社、一九五六年)に「一九五二年三月三日作」として収録されるのだが、「祖国喪失」は他に掲載が見つかっておらず、共に『祖国の砂』のための書き下ろしの可能性がある<sup>③</sup>。井上の参加は、「書かれざる一章」を「頭ごなしに排斥せずに」<sup>④</sup>「文学的に公開すること」(「嘘と文学と日共臨中」『新日本文学』一九五一年六月号)が必要だと主張していた中野による懲罰だったかもしれない。また、谷川の詩も、後に校訂されて詩集に収められたものとはいくつかの違いがあり、誤植の可能性も含めて興味深いヴァリエーションになっている。

他の詩人たちが全く無名の人々ばかりではない。竹内栄美子も指摘していた通り、<sup>④</sup>『祖国の砂』にはこの二人の他にも押切順三、吉田美千雄、錦米次郎、清水清、松永浩介、吉田欣一、えのき・たかし、千早耿一郎、且原純夫らに加え、京大生時代の山崎正和、同じく京大生で後に児童文学作家になる安藤美紀夫、『銀行員の詩集』などから有名になっていく石垣りんも寄稿していた。『京浜の虹』については『人民文学』の読者以外にはなじみのない名前がほとんどだが、先の須藤和光は船方一と松永浩介を「プロレタリア詩運動

時代からの指導的な詩人」として、松崎唯史、山田今次、風間良平、深野利雄、浜田矯太郎を「専門詩人」として紹介している。そして興味深いことに、両方の詩集に収録されているのは松永浩介、山田今次、浜田矯太郎、千原久仁子の四名のみであり、「指導的な詩人」や「専門詩人」のリストにはほぼ重なるのだ。ただし、詩人は同じでも、収録される作品には違いがある。船のリベットの一人称で語られる松永浩介の「かしめ鉾」は両方に収録されているが、平和への願いを高らかにうたった「希い」は『祖国の砂』のみ、「かつて戦場でゆめみたわがふるさと」のエピグラフをもつ「野山を歩こう」と、二人称でうぐいすに呼びかけた「うぐいす春を告げども」は『京浜の虹』のみに収録された。山田の収録詩は全く異なっており、『祖国の砂』には会議の合間に眠る「きみ」を描いた「ねむり」と「ずでってん てってん」のオノマトペで貨車の動きを描いた「貨車」が、『京浜の虹』には曲をつけて歌われるかシユブレヒコールで叫ばれることを想定して作られたようなりフレインに満ちた「京浜労働者の歌」が収録されている。「おのれの川の道筋さえも知らぬものに／父たちや 母たちの／身をけずつた働きを知らぬものに／どうして祖国がうたえようか」と結ばれる浜田の「大岡川」には、『祖国の砂』の巻末に置かれ、えのき・たかしの「祖国」と並んで全体のシンボルとなるような役割を担わされている。しかし、『京浜の虹』では「大岡川」のタイトルで「父たちや 母たちの／身をけずつた働きを知らぬものに」の二行がなくなっている代

「へたくそ詩」再評価のために

わりに、「掘り深い／大岡川よ／私もお前から養分をくみとり／この国土の幸いをたたかいたる一人として／しっかりと地に足をつけた人間になろう。」という末尾の一連が加わっている。それぞれに強調のポイントを変えた編集の上でサークル詩が収録されていた過程が想像される。さらに『京浜の虹』の「輪になって」のパートには、放屁をユーモラスに描いた替え歌らしき浜田の「悪魔ばやし」も収録されている。唯一リストになかった千原の二作は共に子供をうたったもので、夜になっても子供の帰らない不安を描いた「祭太鼓」が『祖国の砂』に、寝ている子の鼓動と赤い顔を見てほっとする「子に寄せて」が『京浜の虹』に収録されている。

詩の初出や再録の判明も後の目次に※印つきで掲載したが、比べてみると、やはり基本的には『京浜の虹』に『人民文学』や周辺のサークル誌から、『祖国の砂』に主として『新日本文学』から、という棲み分けが見てとれる。ただ、『京浜の虹』に『新日本文学』の執筆者が全くいないのに比べて、岩田清、今井朝二、久保田俊夫、加能徹、酒井真右、山崎正和、北本哲三、吉田美千雄の八名は『人民文学』や下丸子の関連サークル誌に執筆歴がありながら『祖国の砂』に収録されている。やはり『京浜の虹』の方が「党派」な性格の強い編集だったと言えるだろう。「たったか／おお たったか／ひろし」とはじまり「へたくそ詩」の代表作の一つとされた「誕生」など三作品を書いた松崎唯史や、「七五三のお祝いー貧しい母のうたえるー」から「おめでとう党よー党二九才の誕生

日によせて―」まで最多の五作品の詩を寄せた松田正治らが『京浜の虹』のみで重用されたのに比べると、先の八人には中野の美意識に合う詩としての形象化があった。しかしそれらとて「雨の降る品川駅」などの中野自身の詩ほど、誰もが認める名作となったわけではない。

既存の文学のルールに従わないのが「へたくそ」だとすれば、「名作」との違いはそのルールの逸脱の方向性にあるだろう。文学のルールから最も悪い意味で逸脱したものととして、先に竹内が指摘した替え歌の例が挙げられる。しかしこれについても、高萩詩人集団再建委員会の岡本重吉による「かえ歌とサークル 労働者はズバリとかえて歌う」（『アカハタ』一九五三年七月一八日）は別の観方を出している。二年ほどのサークル運動の経験の中で、大衆が自由に見向きもしないため、少数の人だけの同人誌と化して行き詰まったという岡本は、その打開の方向を替え歌に求めるのだ。

国民大衆はほんらい健康であるそのとき、その場所で、自由に歌詞をかえ、味方にくつてくる銃弾を、いつのまにか砲弾にかえて敵陣へうちこんでいる。大衆はつぎの機会に、もつとすばらしい「ヤットン節」のかえ歌をつくるだろう。こういうなかから、かえ歌などでない、国民全部にうたわれ、元気づけるような、りつばな歌がうみだされると、期待するのはむりだろうか。

何よりも優先されるのは普及と大衆化であり、質の向上はその後の課題という主張である。この局面において替え歌の作者など誰でもかまわないということになる。その観点から注目すべき両詩集の違いとして、『祖国の砂』は奥付に「筑摩書房」の検印があるが、『京浜の虹』にはなく、「検印省略」の注記もないということが挙げられる。これは部数がコントロールされず、おそらく印税も支払われなかったということを示していると思われる。佐藤泉は、一九五〇年代文化運動の価値を、文学が商品化してしまう前の営為であったという点に求めているが、全く商品たりえない替え歌や、原稿料と引き換えではない無償の詩を集めた『京浜の虹』は、まさにそうした営みの一つの集成であったと見ることもできよう。著作権のルールの外側に位置したこと、十分に商品たり得なかったことを肯定的に見直すことから、「へたくそ詩」の再評価ははじめられるのではないだろうか。

## 二 『祖国の砂』 日本無名詩集』目次

『祖国の砂』	
表紙	難波田龍起
扉	難波田龍起
目次	無署名
祖国の砂（扉）	無署名
	(9)
	(1)
	-1
	-2

装幀	難波田龍起	(10)	渤海附近	木暮真人	41
稲熱病田(扉)	無署名	1	たき火	村岡真知子	47
おみなえし	押切順三	2	外套の詩	北村篤	48
山上部落	押切順三	4	いっばいの番茶	柴村羊五	50
港湾点描	吉田美千雄	6	心のなえる時に	落合みどり	53
天と地と	吉田美千雄	9	心のなえる時に	落合みどり	55
花岡供米事件	錦米次郎	11	しんきろう	草階俊雄	57
燈台	清水清	15	眼鏡について	真貝欽三	59
さくら	清水清	18	祖国(扉)	無署名	61
祖国喪失	井上光晴	20	イボ	近江てるえ	62
廢港	井上光晴	23	プラトーク	山崎正和	64
かしめ鋌	松永浩介	27	なぎなたほおずき	川口しげ子	66
希い	松永浩介	28	生活者	高田正七	68
※『新日本文学』一九五二年五月号。同誌では末尾に「鳩」	9		高原	塚本雄作	70
号」とある。			自転車	石田良雄	73
夜	久保文子	30	ぼくらは平和投票に参加した	安藤美紀夫	75
ねむり	山田今次	33	祭太鼓	千原久仁子	77
貨車	山田今次	34	写真	酒井真右	79
稲熱病田	北本哲三	37	語らねばならぬ	吉田欣一	83
※新日本文学一九五二年三月号。同誌では末尾に「(秋田「処女			ガントリークレン	矢鳥章	87
地帯」9号より)」とある。					
暖冬	北本哲三	38	※新日本文学一九五一年一〇月号。同誌では「YOKOSUKA		
			をうたう4」の副題つき、末尾に「(横須賀支部「岬」6号よ		

り」とある。

祖国	えのき・たかし	90
一九四三年、冬の手帳―ある牧師の思い出―	千早耿一郎	92
故郷	谷川雁	96
革命	谷川雁	97
おれたち	はざま・にん	99
記憶について	長沼静人	101
陥没	合田曠	104
スクラップ集積場	久保田俊夫	110
煤煙	高橋兼吉	113
わたしゃにくい(扉)	無署名	115
品川風景	蛭間裕人	116
茶話三つ	大木静雄	118
道	加能徹	120
からすうり	棲井袖子	122
壁	樋口昭子	126
螺旋階段	なかむら・やすし	128
一日しぶきたてて雨がふった	今井朝二	132
わたしゃにくい―誰のための交換分合か―	矢山みつ	134
除夜に	ふじの・きくはる	139
※『新日本文学』一九五二年四月号。他の記事は藤野菊治名義。		141
転轍手	伊藤習司	141

※『新日本文学』一九五二年五月号の「挨拶」を大幅改稿か？		
おれたちは黙って見つめる	輪島努	143
※『新日本文学』一九五一年七月号の「第三回南丸に寄せる詩」の後日談。		
子等よシヤベルを持って	高田芳枝	147
橋で	大場康二郎	149
キリストの下働き	雨宮杉夫	152
※『新日本文学』一九五二年六月号。同誌では末尾に「(詩集「手と足」より)」とある。		
札幌で	生石保	156
死んだひとに	柏岡浅治	158
※『新日本文学』一九五一年九月号。同誌では末尾に「(あるくらい夜の記憶)「交替詩派」より)」とある。		
北の海	滝川貞夫	163
※『新日本文学』一九五一年一〇月号の「哀しい季節」(「紀南文学」3号より)のヴァリエーション。		
死火山	榎本満	166
※『新日本文学』一九五二年一〇月号。同誌では末尾に「(紀南文学」6号)」とある。		
母と息子たち(扉)	無署名	171
額	武内笛美	172
背後に花のある風景	三枝源七	174

ある機関士の歌

つざか・もとい 176

※『新日本文学』一九五二年二月号、同誌では末尾に「(埼玉

「民芸通信」9号より)」とある。

その足音

池田藤子 179

あいつが喋っている

飯村亀次 181

エア・ドリルのうた

かさい・まさる 183

童説

細川洋子 186

代えがたき友

鈴木豊久 188

あられ

李錦玉 191

※『新日本文学』一九五二年六月号。

東京湾

長沢弘泰 194

そのひとはおあいなさらぬ

岩田清 196

※『日本文学』一九五二年四月号。同誌では末尾に「(全電通)」

とある。

おれたちのふるさと

いくみ・のぶる 199

私の前にある鍋とお釜と燃ゆる火と

石垣りん 202

愛するひと

岩井美沙夫 205

一九五一年広告税について

柳原真砂夫 207

生きている穴

内田豊清 209

裏町

小島義正 211

母と息子たち

瀬下良夫 213

瓦をつくる

且原純夫 218

朝のX字路で

大場豊吉 220

大岡川に

浜田矯太郎 223

※『新日本文学』一九五二年五月号。

作者紹介

無署名 225

解説

秋山清 232

解説

中野重治 239

奥付

無署名 243

広告(ピークスキル事件)

無署名 244

### 三 『京浜の虹 労働者の解放詩集』 目次

表紙(写真)

田村茂 -2

扉(切紙細工)

スズキ・ケンジ -1

編集のことば

理論社編集部 1

(切紙細工)

スズキ・ケンジ 1

目次

無署名 5

プロロオグ『京浜の虹』が生まれるまで

理論社編集部 9

(同人雑誌書影写真)

川島浩 9

この本の 製作にあたった 人々 この本を かざってくれた 人々

無署名(小宮山量平) 16

I 労働者の誕生 \*その血のおいたち\*

無題 (エビグラフ)	(詩集下丸子・きよし・あきもと)	17
※『詩集下丸子 第二集』(一九五二年一〇月)の「眠られぬ夜の労働者のために」の冒頭。		
(切紙細工)	スズキ・ケンジ	17
はじめに	無署名 (小宮山量平)	18
誕生	松崎唯史 (鍛冶屋詩人会)	19
子に寄せて	千原久仁子 (鳩)	23
長靴がほしい	いけのや・つなき (日産文学)	23
母をみつめて	高島青鐘 (詩集下丸子)	24
※『詩集下丸子 第二集』の「詩 母をみつめて」(目次では「おふくろをみつめて」)。		
弔い	小林長義 (鳩)	39
父	みどり・けいこ (鍛冶屋詩人会)	41
母	貫井とよ	41
II 煙る ふるさと	*はぐくむもの*	
	無署名 (小宮山量平)	43
無題 (エビグラフ)	(岩上博司)	43
(切紙細工)	スズキ・ケンジ	43
はじめに	無署名 (小宮山量平)	44
野山を歩こう	松永浩介 (鳩)	45
ながれ	石井たつぞう (神奈川短歌)	46

故郷によせて	岩上博司	46
山によせて	相川正夫	47
扇橋	扇橋渡 (昭電川崎 労声)	48
大岡川	浜田矯太郎 (鍛冶屋詩人会)	49
※『新日本文学』一九五二年五月号。		
運河よ	たなはし・一じ (厚)	50
※『日本文学』一九五二年一〇月号。同誌では末尾に「(日産自動車)」とある。		
京浜地帯	福島和人	50
街路樹	たなはし・一じ (鳩)	52
芽	おおせき・こうきち (神奈川文学)	52
バクチ場	ひろせ・みつじ	54
祖国の中に異国がある	川村庸雄 (詩集下丸子)	54
※『詩集下丸子 第二集』。初出では末尾に「(前進座)」とある。		
大砲	あずま・こうじ (炎)	55
横浜市中心街接収区域略図 (一九五二年八月現在)		
	無署名 (小宮山量平)	55
俺たちの町	野本春一 (わかもの)	56
風土記	浜崎喬 (詩と版画)	57
山	藤田トミ子 (横浜地方貯金局よこはま)	59
III 貧しい朝餉 <small>あさげ</small>	*そのくらしむき*	
	無署名 (小宮山量平)	61

無題 (エビグラフ)	(折本小学校 四年生)	61	ある他、初出では末尾に「(東日)」とあった。
(切紙細工)	スズキ・ケンジ	61	私はいう 一主婦(詩集下丸子)
はじめに	無署名(小宮山量平)	62	※『詩集下丸子 第三集』一九五二年五月の一主婦「検挙にきたら」、『石ツブテ 四号』(発行年月不詳)の「パクリにきたら
味噌汁のうた	勝谷富貴男(風祭)	67	主婦のさげび」の改題。
本	作者不明(東神奈川 くら光り)	67	IVクビ *失業とさくしゅと*
七五三のお祝いー貧しい母のうたえるー	松田正治	68	無署名(小宮山量平)
日曜日	橘孝治(風祭)	69	無題(エビグラフ) (詩集下丸子・栗屋一步)
果実屋で	ひろせ・みつじ	70	※『詩集下丸子 第二集』の栗屋一步(復刻版索引では栗屋一
わだち	朝倉患者自治会	70	歩)「暑い」の二連と四連からの抜粋。
寒い風	金子昌夫(湘南文学)	71	(切紙細工)
お裁縫	ばん・しずこ	71	はじめに 無署名(小宮山量平)
値上り	ひとつばし・すすむ	72	職安風景 松崎唯史(鍛冶屋詩人会)
日給百七十五円	外米えり子(川崎 労働者)	72	クスブリ横丁で 風間良平(炎)
※『詩集下丸子 第一集』(一九五一年七月)。高橋須磨子のペン		72	今日も車をひいて 松崎唯史
ネーム。		72	自由労働者の歌 船方一(炎)
嫂の詩	渡五郎(風祭)	73	朝鮮行きの友へ 作者不明(詩集警告)
おやじさんの話	たかはし・もとひろ(詩集下丸子)	75	ここに泉あり ふかの・としお(神奈川 文学新聞)
※『詩集下丸子 第一集』。		75	どぶろく詩集 船方一(鳩)
一度でよい	作者不詳(約造リペット)	75	春さきの雪 松田正治(鍛冶屋詩人会)
泣声	しま・たかし(詩集下丸子)	76	おどしにひるむ俺達か はたおか・すすむ(炎)
※『詩集下丸子 第一集』のしき・たかし「泣声」。少し異同が		76	V火花 *創りだすちから*

	無題 (エピグラフ)	無署名 (小宮山量平)	97	見てからにしろ	作者不明 (川崎土建)	120
	(切紙細工)	(田中寒雨)	97	生活の斗い	赤形直吉	121
	はじめに	スズキ・ケンジ	97	かみなり	大橋喜一 (小向文学)	122
	朝	無署名 (小宮山量平)	98	同胞よ一斉に旗を下そう		
	機械たちよ	宇野宏 (鍛冶屋詩人会)	99		かんだ・てるいち	126
	労働点抄	ひろせ・みつじ (風祭)	99	五月一日	元木一夫 (日産文学)	127
	冬空	万能鉄太郎 (炎)	100	詩の職工よ	松田正治 (湘南文学)	127
	おまえ生糸よ	南信三	101	VI輪になって	*勝利ちかく*	
	真昼の炎	のぐち・みち子 (鍛冶屋詩人会)	103		無署名 (小宮山量平)	129
	見学	生田麦	104	(平和音頭) (エピグラフ) 無署名		129
	かしめ鋌	園田真 (横浜市大 文芸部部報)	105	(切紙細工)	スズキ・ケンジ	129
	カンカン虫	松永浩介	105	はじめに	無署名 (小宮山量平)	130
	父さんは今日も残業	園新介 (鍛冶屋詩人会)	106	復活	赤石たつや	131
	煙突	佐藤謙介 (日産文学・九才)	107	お手々もあがるネもあがる		
	千円札	並木宗之助 (鳩)	107		昭和電線青婦部「ちかい」	132
	ひとかたまりの星屑の様に	五十嵐房雄 (鶴鉄文芸)	108	詩人と労働者	昭石川崎「暁塔」	133
	懐しい想い出を語ろう	浜崎喬 (詩と版画)	110	悪魔ばやし	浜田矯太郎 (鳩)	134
	跨線橋にて	小早川清 (川高ペンクラブ・竹)	112	リングの唄	タービン・「ブレード」	135
	目標	石井辰蔵 (風祭)	118	トンコ節	日東労組・しぶき	135
	たたかい	坂一平 (京浜 文学新聞)	118	われらがき帖	とんがらし生 (昭和労組青婦対策部 ちかい)	142
		白鳥文夫	119	農民小唄	(川崎各労組)	144
					田中元治	

平和音頭	藤井雅文 (京浜・うたごえ)	144
平和音頭―みんなそろえば―		
平和音頭 (楽譜)	中野良介	145
平和音頭 (楽譜)	中野良介作詩、箕作秋吉、陣之内すみ子作曲	147
京浜労働者の歌	山田今次	148
虎の威を借りる狐と狸とむじなども	もり・けい (池貝・若い樹)	149
VII 嵐ふきすさぶとも	*ととのう戦列*	
無題 (エビグラフ)	無署名 (小宮山量平)	151
(切紙細工)	(幹節夫・「断片」より)	151
はじめに	スズキ・ケンジ	151
それひとつでいい	無署名 (小宮山量平)	152
うぐいす春を告げども	船方一 (鳩)	154
戦争はまつびら	松永浩介 (鍛冶屋詩人会)	154
日本の子―小松三千夫君へ―	ひこた・はるを (帝国酸素 ダイヤル)	155
体温	松田正治	156
彼は退院して行った	福田穂	157
ひげのオジさんから	倉山二郎 (朝倉病院患者自治会 詩集)	159
党の戦列へ	杉浦三郎	160
	のぐち・みちこ	161

「へたくそ詩」再評価のために

道	吉田真二	161
ドオル・ハンター	牧野つとむ (鍛冶屋詩人会)	162
撲られても蹴られても―逮捕された臨港の同志におくる―	川崎隆志 (京浜作家)	163
おめでとう党よ―党二九才の誕生日によせて―	松田正治 (鍛冶屋詩人会)	165
虹	園部亮 (市従文化)	167
奥付	無署名	169

四 人名・団体名索引

相川正夫	京浜の虹	47
赤石たつや	京浜の虹	131
赤形直吉	京浜の虹	121
きよし・あきもと	京浜の虹	17
秋山清	祖国の砂	232
朝倉患者自治会	京浜の虹	70
あずま・こうじ	京浜の虹	55
雨宮杉夫	祖国の砂	152
栗屋一步↓栗屋一步	祖国の砂	75
安藤美紀夫	祖国の砂	181
飯村亀次	祖国の砂	181

五十嵐房雄	京浜の虹	108	大木静雄	祖国の砂	118
生石保	祖国の砂	156	扇橋渡	京浜の虹	48
生田麦	京浜の虹	104	おおせき・こうさち	京浜の虹	52
いくみ・のぶる	祖国の砂	199	大橋喜一	京浜の虹	122
池田藤子	祖国の砂	179	大場豊吉	祖国の砂	220
いけのや・つなき	京浜の虹	23	大場康二郎	祖国の砂	149
石井たつぞう	京浜の虹	46	押切順三	祖国の砂	2、4
石井辰蔵	京浜の虹	118	落合みどり	祖国の砂	53、55
石垣りん	祖国の砂	202	折本小学校 四年生	京浜の虹	61
石田良雄	祖国の砂	73	外米えり子	京浜の虹	72
一主婦	京浜の虹	81	かさい・まさを	祖国の砂	183
伊藤習司	祖国の砂	141	風間良平	京浜の虹	86
井上光晴	祖国の砂	20、23	柏岡浅治	祖国の砂	158
今井朝二	祖国の砂	132	且原純夫	祖国の砂	218
岩井美沙夫	祖国の砂	205	勝谷富貴男	京浜の虹	67
岩上博司	京浜の虹	43、46	金子昌夫	京浜の虹	71
岩田清	祖国の砂	196	加能徹	祖国の砂	120
内田豊清	祖国の砂	209	川口しげ子	祖国の砂	66
宇野宏	京浜の虹	99	川崎各労組	京浜の虹	142
えのき・たかし	祖国の砂	90	川崎隆志	京浜の虹	163
榎本満	祖国の砂	166	川島浩	京浜の虹	9
近江てるえ	祖国の砂	62	川村庸雄	京浜の虹	54

かんだ・てるいち	京浜の虹	126	作者不明(川崎土建)	京浜の虹	120
北村篤	祖国の砂	48	佐藤謙介	京浜の虹	107
北本哲三	祖国の砂	37、38	しき・たかし↓しま・たかし		
草階俊雄	祖国の砂	57	柴村羊五	祖国の砂	50
久保田俊夫	祖国の砂	110	しま・たかし	京浜の虹	76
久保文子	祖国の砂	30	清水清	祖国の砂	15、18
倉山二郎	京浜の虹	159	昭石川崎	京浜の虹	133
栗屋一步	京浜の虹	83	昭和電線青婦部	京浜の虹	132
合田曠	祖国の砂	104	白鳥文夫	京浜の虹	119
木暮真人	祖国の砂	41	陣之内すみ子	京浜の虹	147
小島義正	祖国の砂	211	杉浦三郎	京浜の虹	160
小早川清	京浜の虹	112	スズキ・ケンジ	京浜の虹	-1、1、17、43、61、
小林長義	京浜の虹	39	鈴木豊久	83、97、	129、151
無署名(小宮山量平)	京浜の虹	16、17、18、43、44、	瀬下良夫	祖国の砂	188
		55、61、62、83、84、97、98、	園新介	祖国の砂	213
		129、130、151、152	園田真	京浜の虹	106
三枝源七	祖国の砂	174	園田亮	京浜の虹	105
坂一平	京浜の虹	118	タービン	京浜の虹	167
酒井真右	祖国の砂	79	高島青鐘	京浜の虹	135
作者不詳(約造りペット)	京浜の虹	75	高田正七	京浜の虹	24
作者不明(東神奈川 ころ光り)	京浜の虹	67	高田芳枝	祖国の砂	68
作者不明(詩集警告)	京浜の虹	93		祖国の砂	147

高橋兼吉	祖国の砂	113	なかむら・やすし	祖国の砂	128
高橋須磨子↓外米えり子			並木宗之助	京浜の虹	107
たかはし・もとひろ(高橋元弘)	京浜の虹	75	難波田龍起	祖国の砂	-2、-1、(10)
滝川貞夫	祖国の砂	163	錦米次郎	祖国の砂	11
武内笛美	祖国の砂	172	日東労組・しぶき	京浜の虹	135
橘孝治	京浜の虹	69	貫井とよ	京浜の虹	41
田中寒雨	京浜の虹	97	のぐち・みち子(のぐち・みちこ)	京浜の虹	103、161
田中元治	京浜の虹	144	野本春一	京浜の虹	56
たなはし・一じ	京浜の虹	50、52	はざま・にん	祖国の砂	99
谷川雁	祖国の砂	96、97	はたおか・すすむ	京浜の虹	96
田村茂	京浜の虹	-2	浜崎喬	京浜の虹	57、110
千早耿一郎	祖国の砂	92	浜田矯太郎	京浜の虹	49、134、
千原久仁子	京浜の虹	23	ばん・しずこ	祖国の砂	223
塚本雄作	祖国の砂	77	樋口昭子	京浜の虹	71
つぎか・もとい	祖国の砂	70	ひこた・はるを	祖国の砂	126
棲井袖子	祖国の砂	176	ひとつばし・すすむ	京浜の虹	155
とんがらし生	京浜の虹	122	ひろせ・みつじ	京浜の虹	72
長沢弘泰	祖国の砂	136	蛭間裕人	京浜の虹	54、70、99
長沼静人	祖国の砂	194	ふかの・としお	祖国の砂	116
中野重治	祖国の砂	101	福島和人	京浜の虹	94
中野良介	京浜の虹	239	福田穂	京浜の虹	50
	京浜の虹	145、147		京浜の虹	157

藤井雅文	京浜の虹	144
藤田トミ子	京浜の虹	59
ふじの・きくはる	祖国の砂	139
船方一	京浜の虹	90、94、154
細川洋子	祖国の砂	186
真貝欽三	祖国の砂	59
牧野つとむ	京浜の虹	162
松崎唯史	京浜の虹	19、86、89
松田正治	京浜の虹	68、95、127、156、165
松永浩介	京浜の虹	45、105、154、165
万能鉄太郎	祖国の砂	27、28
幹節夫	京浜の虹	151
箕作秋吉	京浜の虹	147
みどり・けいこ	京浜の虹	41
南信三	京浜の虹	101
村岡真知子	祖国の砂	47
元木一夫	京浜の虹	127
もり・けい	京浜の虹	149
矢島章	祖国の砂	87
柳原真砂夫	祖国の砂	207
山崎正和	祖国の砂	64

山田今次

京浜の虹

148、

矢山みつ

祖国の砂

33、34

吉田欣一

祖国の砂

134

吉田真二

京浜の虹

83

吉田美千雄

祖国の砂

161

李錦玉

祖国の砂

6、9

理論社編集部

京浜の虹

1、9

輪島努

祖国の砂

143

渡五郎

京浜の虹

73

注

(1) 鳥羽耕史『1950年代「記録」の時代』（河出書房新社、二〇一〇年、二四～二五頁）。

(2) 竹内栄美子『戦後日本、中野重治という良心』（平凡社、二〇〇九年、一四五～一四六頁）。

(3) 井上光晴『十八歳の詩集』（集英社、一九九八年）所収の川西政明編『井上光晴書誌』『井上光晴年譜』による。

(4) 竹内栄美子前掲書、一三五頁。

(5) 佐藤泉『1950年代文化運動の思想——集団創造の詩学／政治学』（『立命館法学』三三三・三三四号、二〇一〇年）。